

国立国語研究所学術情報リポジトリ

The Construction of Gender Ideology in the Japanese Media

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-03-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大原, 由美子, OHARA, Yumiko メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00002082

メディアにおけるジェンダーイデオロギーの再構築と維持

大原 由美子

(元国立国語研究所招聘外国人研究員)

1. はじめに

ディスコースが知識を構築する (Fairclough 1989, 1995a, Foucault 1978) という見解がある。この意味で、マスメディアにおけるディスコースは瞬時にして大量の視聴者を受け手とする¹ものであり、その効力は絶大である²。近年メディアディスコースに関する研究分野がますます拡大するなか、権力体制とディスコースの関連性についての研究で目覚ましい展開を見せているものにクリティカルディスコース分析 (critical discourse analysis) がある。メディアに関するクリティカルディスコース分析の代表的研究とも言える Fairclough(1995b)は、公的ディスコースと私的ディスコースという分類を基盤に英国のメディア、特にテレビ、ラジオ、出版物における社会的、文化的変化を検証している。日本社会に関する研究としては、宇野元首相の婚外性交渉および買春問題を起爆剤とした社会的、政治的変化について、テレビでのインタビュー、雑誌記事、新聞記事を比較した Reynolds(1999)の分析がある。しかし、クリティカルディスコース分析の観点からの日本社会に関する研究 (Hayashi 1997, メイナード 1997, Ohara 1999, 2000, 齊藤1998a, 1998b, Satoh 2001)はまだ始まったばかりと言っても過言でなく、特にテレビ番組の分析はまだほとんどなされていない。本稿は、クリティカルディスコース分析の観点からテレビの相談番組を分析し、メディアにおいてジェンダーイデオロギーの再構築が行われる過程を明らかにすることを目的としている。ここで言うジェンダーイデオロギーとは、社会的に形成されるジェンダーに基づき、ディスコースによって常識化される、権力構造に関わる概念 (Fairclough 1989) のことである。本稿では、相談番組の構成と実践されるディスコースにおいて頻繁に見られる「評価」と「すり替え」という二つの言語行為を軸に、ジェンダーイデオロギーの再構築の過程に焦点をあてることにする。

2. ジェンダーアイデンティティとジェンダーイデオロギー

中村(2001)は、ジェンダーイデオロギーを「ディスコース実践の中で作られた様々なジェンダーアイデンティティが、特定の社会の権力関係の中で歴史的に構造付けられたイデオロギー」と定義している。近代日本文化におけるジェンダーアイデンティティの主要なものの一つに「女は優しく大人しく」と「男は強く逞しく」がある。これらのジェンダーアイデンティティには「女らしい女」「女らしくない女」「男らしい男」「男らしくない男」というカテゴリーとそれに付随する価値観が含有され、これにより性差に基づくしつけ、教育、さらには性別役割分業などが常識化されている。「女は優しく大人しく」と「男は強く逞しく」というジェンダーアイデンティティが、名前から、玩具、衣類、教育、就職、趣味に至るまで影響を及ぼしているのである。性別役割分

業について補足すれば、ジェンダーアイデンティティは女は家庭、男は仕事という大きな規模での分業だけではなく、企業内部での分業を正当化する機能を果たしている。具体的には、「女は優しく大人しく」というジェンダーアイデンティティと「指導し命令する」という上司のアイデンティティは矛盾するということがある。これが、女性は部下を指導する立場には向いていないという考えにつながり、それが女性を昇進させない、または女性を昇進するような仕事にもともと向いていないという支配的イデオロギーを正当化し、同時に再構築する役割を担っているのである。また、若い独身の女性を対象としたOLという特殊な職種を正当化しているのも、このジェンダーアイデンティティに他ならない。このようなジェンダーアイデンティティは、権力関係を伴う社会構造に寄与することから支配的イデオロギーであり、その構築にはディスコースが強く関与している。次節では分析対象である相談番組のディスコースについて詳しく説明することにする。

3. 資料およびその意義

3.1. 資料

資料として用いたのはテレビ番組『午後は〇〇（まるまる）おもいっきりテレビ』である³。『午後は〇〇（まるまる）おもいっきりテレビ』は1989年に始まり、2001年で13年目の、週日毎日正午から午後2時まで全国放送をしている番組である。生活一般に関する情報、例えば、健康、経済など毎回違ったテーマを取り上げ、各界の専門家が最新情報と意見を提供するという形式をとっている。また独自の雑誌、およびWebページを所有し、番組区分としては情報番組となっている。2時間の番組のうち15分は視聴者からの電話による身の上相談にあてられており、本稿ではこの電話相談（以下「生電話」とする）の分析を行った。相談者はほとんど女性で⁴、相談の内容は夫、夫の親、自分の親、子供に関する事など多様であるが、本稿では夫に関する相談を扱った。相談を受ける側は司会者と番組のゲストで、ゲストは女性2人男性2人の俳優、歌手といった俗に言うタレントで構成され、顔ぶれは毎回代わっている。

3.2. 資料の意義

相談コーナーという性質上、「生電話」では司会者とゲストは、相談者の抱える問題に対してどうするべきか、どう考えるのがいいかということをも具体的に示すことが多い。また、相談内容についても何が正しく、どのような行動は慎むべきか、人はどうあるべきかという社会的知識、もしくは常識とされるものも多く明示される。更にここで扱う夫婦のことに関する相談では、ジェンダーに関するアイデンティティとイデオロギーが顕著に示されることが観察されている（Ohara 2000）。これらのジェンダーアイデンティティとジェンダーイデオロギーについての考察に適しているという理由から、夫婦に関する相談を分析対象として取り上げた。また、夫のことでの悩みの一般性も選択の理由の一つとしてあげられる。「生電話」への相談のうち夫に関するものの割合は、観察した約50回の番組に限って言えば約半分であった。新聞の人生相談コラムの研究も、夫に関する相談の多さを裏付ける数値を示している。日本の新聞に掲載されている人生相談コラム

の分析を1年近く行った McKinstry and McKinstry(1991)は、相談の9割が女性の読者からで、その中で一番多いのが結婚生活に関するものであり、そのうち約4割が不幸な結婚生活の原因を夫の性格や行動にあるとしていると報告している (pp.17-19)。また上でも述べたように、『午後〇〇おもしろいテレビ』が情報番組として週日毎日放送されていることから、メディアディスコースの影響力という点で、分析対象として有意義であると思われる。

4. 分析

「生電話」はあらかじめ決まった順序によって進行する。司会者とゲストがその日の天候や番組の特集などについて数分話し、その後司会者が電話口で待機していた相談者に向かって話し始める。挨拶の後、司会者の質問に答えて相談者が相談の趣旨を説明する。下記は相談の最初の部分、司会者が電話を通じて相談者に話しかけるところである。

(1)⁵ 8-6-1998

- 1 司会者 もしもし
- 2 相談者 あ (0.3) もしもし
- 3 司会者 あどうもこんにちは
- 4 相談者 こんにちは：：よろしくお願ひいたします
- 5 司会者 どうしました：：
- 6 相談者 はいあのものすごく亭主関白でけちで暴力をふるう夫と
- 7 別れたいんですけどもどうしたらよいかご相談よろしく
- 8 お願いします

1～4行目の挨拶の後、司会者の5行目での「どうしました」という発話に答え、相談者は自分の置かれている状況と相談の意図を6～8行目で端的に述べている。次に司会者は相談者の家族構成と年齢、相談にまつわる人々の年齢と関係について質問し、相談内容が明らかになっていく。その後、質問と答えを核に会話が展開され、司会者とゲストが相談内容もしくは相談者自身に対して評価 (Goodwin and Goodwin 1992) を行うというのが常である。

下記の会話は夫の数年にわたる婚外性交渉についての相談の始まりの部分である。なお、F1はゲストの1人の女性である。

(2) 4-5-1999

- 1 司会者 お子さん
- 2 相談者 えあの長女とあと (0.3) 次女あのですが23才と19なんです
- 3 F1 きれいなんじゃない
- 4 司会者 お嬢さん方知ってんの
- 5 相談者 し-そうなんです

- 6 司会者 じゃあお父さんつらい立場だわ
7 相談者 は

ここでは司会者が相談者の家族構成について1行目で質問を行い、相談者がそれに2行目で答えている。その後、4行目で司会者は娘たちが状況を把握しているかについて聞き、相談者が肯定的な答えを出している。6行目で司会者が評価を行っているが、これは夫の立場に対する意見である。相談者や子供の立場に同調するということが可能ななか、司会者は相談者の悩みの原因となっている婚外性交渉を続ける夫に同調するコメントをしている。これに対して相談者の反応は「は」のみで、その後、司会者は次の質問に移っている。

下記の抜粋は、生活費を出さない夫についての相談で評価が行われる例である。

(3) 12-8-1998

- 1 司会者 亭主はなんだっつうの
2 相談者 何も言ってくれないんです
3 司会者 お見合い？
4 相談者 恋愛です
5 司会者 ああやっぱり恋愛したあなたがバカなんだね
6 相談者 え
7 司会者 なんでそんな男と(0.3)恋愛するのがバカなんだよ
8 相談者 あ
9 司会者 いやでしょ自分たちの生活設計何もないじゃない
10 相談者 はいそうですね

1行目で司会者は生活費を出さない夫の言い分について質問し、2行目で相談者が「何も言ってくれないんです」と答えている。3行目で司会者は相談者の結婚のいきさつを「お見合い？」と聞いている。4行目で相談者が「恋愛です」と答えると、5行目で司会者が相談者自身に対する評価を示している。評価の内容について考察する前に、これらの抜粋(2)や(3)で見られる評価は番組の構成に関与するところが少なくないという点を指摘したい。つまり、まず相談者が自分が困っていること、悩んでいることについて話し、それについて司会者やゲストが評価を行うという順序自体が、評価という行為に基本的な面で寄与しているということである。相談コーナーという性質上、相談者が自分のもつ問題を明らかにするのは当然のことに思われるが、Hutchby(1996)がラジオ討論番組の分析で記述しているように、番組の聴取者が自分の立場を司会者より先に明らかにすることによって、司会者が聴取者の立場に対する意見を、自分の好きなように展開するということが可能にしている。同様に「生電話」の場合も、相談者が先に自分の問題を指し示すことにより、司会者やゲストが評価をする機会が生まれ、同時にその評価の趣旨は司会者やゲストの随意のものとなるのである。

また、ここでの評価は相談者にとっては肯定的なものではないが、それに対して上記の抜粋（２）同様（３）にも相談者の弁明や反対意見などは見られない。５行目の司会者の「ああやっぱり恋愛したあなたがバカなんだね」という発話に対して６行目で相談者は「え」と言っている。その次の行で再度司会者が、５行目の発話と同じ趣旨の「なんでそんな男と(0.3)恋愛するのがバカなんだよ」と述べている。それに対する相談者の発話は「あ」のみである。相談者の反応がこのように最小限に留まっていることは注目に値する現象である。またこれは Goodwin and Goodwin (1992) が示した評価と基本的に異なる部分でもある。アメリカ文化における米語での会話を検証した Goodwin and Goodwin(1992)は、評価はただ単なる記述としてではなく、それに対する意見を示す機会として受け取られ、通常受け手から最初の評価に対する新たな対評価がなされるとしている。しかし上記の抜粋（２）、（３）から明らかなように、司会者の評価に対する相談者からの意見もしくは評価は見られない。ここでは「おんな言葉」に関する概念⁶—女らしく話すということに関する規制、例えば反論するのは女らしくない—もしくは有名人と一般人という社会的地位の差⁷が関わっているということもむろん考えられるが、反論がされていないということが、先に相談者が問題を明らかにするという番組の構成と相まって、会話の展開が司会者のペースで進んでいくことが観察される。また、この１）相談者が問題をまず明らかにする、２）司会者の評価に対する相談者の反論がないという２点は、次に見る「問題のすり替え」という言語行為にも寄与している。ここでいうすり替えとは相談者の提示した問題の焦点をずらす、もしくは問題とされること自体を他の問題に置き換えるという行為を示す。抜粋（４）は、夫の子供に対する幼児虐待行為についての相談である。

（４）8-17-1998

- 1 相談者 食べこぼしがあるんですけども下の子なんかまだ２才でね
- 2 ああのテーブルにお茶とかこぼすんですよ：：
- 3 司会者 うん
- 4 相談者 で手でパチャパチャってやって遊び出すんですけどもそれで
- 5 またヒステリックになって怒るし
- 6 司会者 なるほど
- 7 相談者 ええであの真ん中の子供ちょっとお行儀が悪くて食べこぼしが
- 8 ひどくって
- 9 司会者 うん
- 10 相談者 ああの：それをまた見ると足を持って引き摺り(0.3)引き摺りまわ
- 11 して放り投げるんですよ：：
- 12 司会者 うん
- 13 相談者 だから幼児虐待—幼児虐待みたいなそんな感じなんですけども
- 14 司会者 怒り方もね：
- 15 相談者 ええ

相談者はここで状況を描写し、夫が何に対して怒り子供に何をするかを述べている。

下の抜粋（５）は（４）の続きで、M1はゲストの1人で男性である。

（５）8-17-1998

- 16 M1 24時間怒鳴りっぱなしっていう感じがするんですけどそんな
17 ことでもないんでしょ
18 相談者 あ寝てる時だけ
19 M1 え？
20 相談者 静かなのは寝てる時だけであの：＝
21 M1 ＝だけどだけど結婚10年でしょ
22 相談者 ええ
23 M1 お子さんも3人いらっしゃるわけでしょ
24 相談者 はい
25 M1 だからやっぱり(0.3)だんなさんの(1)お：いろんな性格の中で
26 やっぱり好いたらしい部分ってあるでしょあなたから見て
27 相談者 はあ(1)
28 M1 すてきな部分ってあるでしょ
29 相談者 ええそれはねだからなんていうのかなええっと
30 M1 だから逆に言うとあなたの方が逆に変にこう神経が
31 尖っちゃって
32 相談者 あそうなる時がありますやっぱり
33 M1 神経質になっちゃってそんでもってだんなさんのそういう部分
34 ばかり受信してるって気がしないでもない
35 相談者 あ：
36 M1 だからね人間ってそうなのよこの人本当にヒステリー(0.5)
37 かしらって思ったらだんだんだんだんヒステリー部分が余計
38 あなたの心に映るようになっちゃって
39 相談者 ええ

上の抜粋（５）では16～17行目のM1のいつも怒鳴っているわけではないでしょうという質問に対し、相談者は18行目と20行目で寝ているとき以外はと答えている。それに対しM1は20行目の相談者の発話に割り込み、21行目と23行目で相談者の結婚年数、子供の人数という事実を持ち出している。その事実に基づきM1は25～26、28行目で相談者の夫に「好いたらしい部分」（26行目）、「すてきな部分」（28行目）があるでしょうという発話をしている。それに対する相談者の答えは「ええそれはねだからなんていうのかなええっと」（29行目）で具体的な内容を示していない。その後M1は30～31、33～34、36～38行目で、夫の行動を相談者が気にし過ぎていると述べてい

る。夫の行動に問題があるのではなく、相談者の見方に問題があるというのである。それに対する相談者の反応は抜粋(2)、(3)で観察されたものに近く、「あ：」(35行目)と「ええ」(39行目)のみである。下記の抜粋(6)は上の(5)の続きである。

(6) 8-17-1998

- 40 M1 だからどうもあなたのお話聞いてるとそういうとこだけが(0.5)
41 だんなさんのそういう部分だけがうんと気になってるっていう
42 感じがする(1)そうするとますます(0.5)ますます(0.5)旦那様の
43 そういう部分がこう(0.5)広がってっちゃうんじゃないかな：
44 相談者 あのいい所と言えばあの：食事のあと食器などの後片付けなん
45 ですけども
46 M1 うん
47 相談者 あのけっこう私もやっぱのんびりしてるものですから
48 M1 うん
49 相談者 あの夜遅くなっちゃう時があるんですけどもあの：主人がね
50 あの洗っとくから先に風呂入っておいでって言う時があるん
51 ですよ
52 M1 そんな優しいこと言ってくれる人いないよ今世の中
53 相談者 でそういう時はすごうれしくてあ(0.3)優しい人なんだな：
54 って思いますよね(0.3)で最近気がついたんですけどもあの：
55 それはね(0.3)夫婦生活が有る時だけなんですよそういうこと
56 M1 だからやっぱりその優しい所にもっともっといっぱいあるよ
57 きっと(0.3)そういうところに気がついたらいいんだよ

相談者は上の抜粋(6)の44~45, 47, 49~51行目で(5)の25~26, 28行目のM1の問い、夫の「好いたらしい部分」(26行目)、「すてきな部分」(28行目)についての答えを出している。「優しい人なんだな：」(53行目)と思うようなことを言う時も実は「夫婦生活が有る時だけ」と述べている。相談者は抜粋(4)で夫の「幼児虐待みたい」(13行目)な行為と(5)でいつも怒鳴っている状態を描写し、(6)では夫婦生活が有る時だけ食器を洗うから先にお風呂に入ると優しいことを言うという説明をしているのにも拘わらず、M1は終始一貫して夫のいい部分を相談者が見ようとしていないとし、相談者の夫を「そんな優しいこと言ってくれる人いないよ今世の中」(52行目)と評し、もっと「その優しい所」(56行目)に気付くべきだとしている。相談者が提示した「幼児虐待みたい」(13行目)な行為をし、「寝ている時以外は怒鳴っている」(18, 20行目)夫が「優しいこと言ってくれる人」(52行目)にすり替えられ、夫の行為が、相談者の「神経質になっちゃって」(33行目)、「だんなさんのそういう部分ばかり受信して」(33~34行目)、「だんなさんのそういう部分だけがうんと気になってる」(41行目)という相談者自身の気質的もしくは、

感情的な問題に置き換えられているのである。上記の抜粋（４）、（５）、（６）ではM1という男性のゲストと相談者の発話を見てきたが、下の（７）は（６）の続きで女性のゲストである。

（７） 8-17-1998

- 58 F2 利用すればいいのにそういうところ例えばあの片付けて一片付
59 けるものの場所を決めると割と(0.5)スムーズに行くんですよ
60 (0.3)だからおもちゃならおもちゃ箱を1個作っちゃえば必ず
61 そこに入ればいいとか引き出しもあの最初は大変だけどその
62 ものも居場所っていうのちゃんと決めてあげるとそうすると
63 そんなに大変じゃなくてけっこう(0.3)スムーズに楽しくできる
64 んですよ
65 相談者 はあ
66 F2 うんだからあの反対に私もそういうふうになるまですごい
67 だらしなかったんですけどもあの台所でもなんでもね整理
68 整頓されていることが気持ちいいっていうふうに自分を訓練
69 していくと本当に例えば子供がママどこどこのお箸どこだっけ
70 って言っはいいそれはどここの引き出しの右側から何番目
71 っていうのがわかるぐらい(0.5)すごいそういうそういうことが
72 楽しくなれるようになるんですよ
73 相談者 そうですか

F2は58～64、66～72行目で相談者の夫の行動ではなく相談者自身の家事能力のなさを前提に「自分を訓練していく」（68～69行目）やり方についてアドバイスをしている。この発言には家庭の仕事は女の役割であり、夫がこれほど怒り、怒鳴り、暴力を振うのは妻が家の仕事をきちんとしていないからだろうという憶測が見え隠れするように思える。現にF2の「私もそういうふうになるまですごいだらしなかったんですけども」（66～67行目）という発話は、相談者が「すごいだらしない」という仮定によって成り立つものである。しかし、相談者はこの相談全体を通して自分の家事能力については全く言及していない。相談者が自分のことで述べているのは抜粋（６）47行目の「あのけっこう私もやっぱのんびりしてるものですから」だけである。夫の「幼児虐待みたい」（13行目）な行為という問題が、相談者の家事能力の欠如というまったく違った問題にすり替えられているのが観察できる。

次の抜粋は、上記の抜粋（２）の夫の数年にわたる婚外性交渉に関する相談の終わりの方の部分で、ゲストのF3とF1は女性、M2とM3は男性である。

（８） 4-5-1999

- 1 M2 いや放っといってくれっていうよりも放っておかないと(0.3)仕方
2 がないと思うんですよ突っつけば突っつくほどだって殴ったり

- 3 暴れたりするわけでしょ
 4 M3 うん
 5 M2 悪いと思ってるんですよ自分も
 6 相談者 あそうですか
 7 M3 これやっぱり追い詰めたからプライドを傷つけられたわけです
 8 よ(0.3)男ってねプライドを傷つけられるとね(0.3)
 9 相談者 そうですね

抜粋(8)で婚外性交渉を続けている夫を「放っておく」というこの抜粋以前から続いているアドバイスを、M2は1～3行目でくり返している。また5行目では「悪いと思ってるんですよ自分も」という夫の気持ちを弁明するような発話をしている。7～8行目ではM3が男のプライドという観点から、夫が暴力を振う理由を、相談者が婚外性交渉について問い詰めたからだとしている。問題は婚外性交渉を続け暴力を振う夫ではなく、婚外性交渉について聞いた妻であるということであろう。婚外性交渉について聞くことが、「突つつく」(2行目)こと、「追い詰める」(7行目)ことで、追い詰めることはプライドを傷つけることになり、男にとってプライドを傷つけるのは良くないことである(7～8行目)という理屈に基づいてジェンダーアイデンティティが再構築されている。上記の抜粋(4)～(8)で観察されたように、相談者が悩んでいる夫の行動が妻の言動によって引き起されたもの、妻の責任とされているのは興味深い点である。次の抜粋は、(8)の数秒あとの会話で、すり替え、評価、ジェンダーイデオロギーの再構築がなされている例である。

(9) 4-5-1999

- 1 M2 そのご主人と楽しくなんか過ごせる時間をうまく見つけて
 2 そのこと
 3 相談者 [そうですね
 4 M2 [でなんか付き合っていくことが大切なんじゃないでしょうか
 5 相談者 今まで以上にちょっとあの自分もねちょっと磨いてきれいに
 6 なりまして
 7 F3 あ：：：：
 8 F1 あら：：：：
 9 M3 それはいいことですね
 10 M2 すばらしいと思うな
 11 F1 私ねこういう女性だったら大丈夫だと思う(0.5)でこういうこと
 12 をきっかけにして女の人ってあれってちょっと振り返ることっ
 13 てほんとのこと言ってあるんですよ
 14 F3 ゼラチン食べてね

- 15 F1 そうねだからトモチちゃんじゃないけどゼラチン食べて
 16 フルーツも一緒に食べて
 17 F3 うん
 18 F1 でもすてきじゃないですかでもよくあなたおもしろーうまくこう
 19 ポーンとうまく転換できましたね
 20 相談者 ええ
 21 F1 どのくらい時間かかったの
 22 相談者 だいぶもうだいぶあのここまで来るのはだいぶかかりました
 23 F1 偉い
 24 M2 偉い
 25 司会者 でもあれでしょそこまで努力したのはご主人を愛している
 26 からでしょ
 27 相談者 そうですね

抜粋(9)の1～2行目、4行目でM2が「楽しくなんか過ごせる時間」(1行目)を持つようアドバイスしている。このあと相談者が5～6行目で「今まで以上にちょっとあの自分もねちょっと磨いてきれいになりまして」と述べ、ゲスト全員から非常に肯定的な評価(「あ：：：：」、「あら：：：：」、「それはいいことですね」、「すばらしいと思うな」)を受けている(7～10, 18行目)。「でもよくあなたおもしろーうまくこうポーンとうまく転換できましたね」(18～19行目)、「どのくらい時間かかったの」(21行目)というF1の発話に、相談者は「だいぶもうだいぶあのここまで来るのはだいぶかかりました」(22行目)と答え、同じように肯定的な評価(「偉い」、「偉い」)を受けている(23～24行目)。この「自分を磨く」という発想は男性の婚外性交渉に関するディスコースに頻繁に出てくるものであり、このコンテキストでは通常自分の知識や能力を伸ばすという意味ではなく、見た目を良くする、きれいになるという意味あいで使用される(Ohara 2000)。この抜粋でもその意味で使われているということは、相談者の「今まで以上にちょっとあの自分もねちょっと磨いてきれいになりまして」(5～6行目)という発話から明らかである。また、14～17行目のゼラチンに関するゲストの発話も、美しくなるための方法という意味で使われているのがわかる。婚外性交渉を続けている夫を責めずに放っておくことと、女性の魅力としての見た目の良さ(町野1985, Ohara 1999)を高めることの重要性を強調するディスコースが構築されている。ここで興味深いのは、この「自分を磨く」というディスコースが、相談者自身から出されているという点である。司会者とゲストがあるジェンダーイデオロギーを一方向的に強要するのではなく、相談者が率先して出したものを全員で再構築している過程が観察できる。夫の婚外性交渉という問題がここで放置され、浮気されたら夫を責めずに自分を磨くことに専念するというジェンダーイデオロギー(Ohara 2000)の構築に、相談者、司会者、ゲストの全員が積極的に寄与しているのである。司会者が25～26行目で相談者が自分を磨いたのも「ご主人を愛しているからでしょ」と言い、相談者が肯定しているという点もこのジェンダーイデオロギーの構築の一部をなしてい

る。この相談はこのあと挨拶があり完結するわけだが、次に相談の終わり方について分析を続ける。下の抜粋は上記(4)～(7)でみた相談とはまた別の、暴力を振う夫に関する相談の終わりの部分である。

(10) 7-10-1998

- 1 司会者 楽しい夏休みももうすぐ来るんだから
- 2 相談者 そうですね
- 3 司会者 ね：
- 4 相談者 ありがとうございます失礼します
- 5 司会者 あどうも

上の抜粋(10)の4行目で見られるように、相談は相談者がお礼を言うことにより終結する。観察したすべての相談で相談者がお礼を言うことにより、電話での会話が終わっている。相談コーナーの構成としての始まりと終わりについて、言語行為としての評価、すり替えとともに次節で考えていきたい。

5. 考察

「生電話」における相談の始まりと終わりの実践のされ方、および評価、問題のすり替えの過程を見てきたわけだが、ここで実際の構成とディスコースの代わりとなりうるものの可能性を考へることによって、現行の「生電話」のあり方だけが自然なものでも、普通のものでもないということが見えてくるということを指摘したい。先に見たように、相談の始まりに相談者がよろしくお願ひしますと言い(抜粋1)、相談の最後にお礼を言う(抜粋10)のが、通常この相談コーナーで見られる形式である。お礼を言う行為を例にとれば、司会者が話題を提供してくれた相談者にお礼を言うという形式も考えられるわけである。相談にのってもらい、テレビにも出演させてもらって、お礼を言うのは当たり前で、常套句にいちいち意味を見出すのは深読みという見方もあるだろう。しかし常識とされること、もしくは暗黙の前提にこそイデオロギーは潜んでいるのである(Fairclough 1989)。つまりすべての回が相談者がお礼を述べるという形で終わるということが、安易に相談者が司会者やゲストの評価やすり替えに納得していて、アドバイスが適切もしくは有効であったかのような印象を表現していると言えないだろうか。さらにこのような言語行為がマクロレベルでのジェンダーイデオロギーを強化し維持する役割を果たしているという可能性は見過ごせないものである。

また「生電話」では評価は司会者とゲストだけが行っているが、相談者が司会者やゲストの考え方やアドバイスに対する評価を行うという構成であれば、実践されるディスコースにも影響が出るのは確かである。さらに上で見たお礼の例のように、否定的な評価に対して最低限の反応を示すだけで弁明や反論がされていないことも、相談者が評価を受け入れているという印象を造り出している可能性は否定できない。ゲストと司会者による相談者の問題のすり替えについても同

じ事が言える。もちろん相談者の思いは計り知れないと同時に、視聴者がどのようにこの番組を受け取っているのかはこの分析から察する範囲外のことである。しかし田中(1997)が外国人に関する問題のテレビドキュメンタリーについて、選択的な見方を持つ視聴者がいる「にもかかわらずテレビはそれでもヘゲモニーを強化するように働く」(p.253)と記しているように、ミクロレベルでのディスコースにおける抑圧とともに、マクロレベルでのジェンダーイデオロギーの再構築と維持に関わるメディアディスコースの影響(van Dijk 1993) を考える必要がある。正にここで検証したディスコースはマスメディアにおける思考操作(van Dijk 1993, 1998) の実践であり、ジェンダーイデオロギーが自然化(Fairclough 1989) され常識化される過程の一部であるといえることができる。

6. おわりに

本稿は、メディアディスコースにおいて番組自体の構成に寄与する言語行為とともに、評価とすり替えという言語行為が駆使され、ジェンダーイデオロギーが再構築される過程を明らかにした。家庭内暴力や夫の婚外性交渉などの相談者が悩んでいる問題の本当の原因は、夫にではなく相談者自身に起因するものであるというメッセージが、メディアにおいて繰り返し繰り返されられる様子が観察された。更に、婚外性交渉を続けている夫は責めずにそっとしておき、自分を磨くことに専念し、暴力を振う夫のよい部分を探して楽しい時間を過ごすべきであるといったジェンダーイデオロギーも同時に見られた。この点については、もちろんサイコセラピーの基本論理として人の行動を変えることを考えるより、自分の見方を変えるという見解があり、その有効性も認められている⁸が、本稿で考察したディスコースの効力、特にジェンダーイデオロギーの再構築と維持のもとに、家庭内暴力が日常化している現状が無視されていく危険性も考慮する必要があると思われる。中村(2001)が「多くの抑圧は常識となってわれわれを縛っているために、何かがおかしいと感じること自体が難しくなっている。そこに問題があると認識するためには、ジェンダーがディスコースを通して社会的に作り上げられている過程を明らかにすることが必要となる」(pp.121-122)と述べているように、ディスコースとイデオロギーの関係は単純なものではない。しかしここで観察されたようなある一定のイデオロギーを、メディアにおいて繰り返し構築し、放送することの社会的影響力は測り知れないものである。ディスコースは社会を反映するだけでなく、社会行為そのものであり、社会構造を再構築し、維持し、強化する(Fairclough 1989) というクリティカルディスコース分析の基本概念を再度強調して終わりとした。

注

- 1 井上・江原(1999)は日本人1人あたりのマスメディアの平均視聴時間を1日4時間半としている。
- 2 日本におけるメディアによる女性性の構築については、中村(2001)、井上・上野・江原(1995)を参照。
- 3 『午後は〇〇おもいきりテレビ』の「生電話」の部分において行われた会話を学術研究に使用

することに関して、製作者日本テレビ、コンテンツ事業局ライセンス推進部より著作権法上認められた引用の許可を得ている。

4 1998年から1999年の間に録画した約50回分の番組の中で男性の相談者は70代の男性1人だけであった。

5 書き起こしに使用した記号は以下の通りである。

_____	音量が大きく強調された調子
?	上昇イントネーション
: :	母音の引き延ばし
(0.0)	ポーズの長さ
—	言い淀み
=	割り込み
[同時発話

6 「おんな言葉」については井出(1993)、中村(2001)、れいのるず=秋葉(1993)を参照。

7 基本的に相談者がデス/マス体、司会者とゲストがダ体を使用しているということもこの意味で興味深い点である。

8 東京で臨床心理学者として活動している Prem Dana Takada 氏は、このサイコセラピーの基本的概念だけではなく、この点に関して日本文化というコンテキストの重要性も指摘している。

参考文献

- 井出 祥子編 (1993) 『日本語学』 臨時増刊号 「世界の女性語・日本の女性語」 明治書院
- 井上 輝子, 上野 千鶴子, 江原 由美子 (1995) 『表現とメディア』 岩波書店
- 井上 輝子, 江原 由美子 (1999) 『女性のデータブック』 有斐閣
- 斉藤 正美 (1998a) 「クリティカルディスコースアナリシス—ニュースの知/権を読み解く」 『マスコミュニケーション研究』 52 : 88-103
- 斉藤 正美 (1998b) 「反戦直後の新聞に見る女性参政ディスコースとジェンダー」 『女性学』 16:94-115
- 田中 望 (1997) 「外国人問題とメディア：関係的なメディアの消費に向けて」 国立国語研究所編 『多言語・多文化コミュニティのための言語管理—差異を生きる個人とコミュニティー』 251-259.
- 中村 桃子 (2001) 『ことばとジェンダー』 勁草書房
- 町野 美和 (1985) 「女の価値は顔」 駒尺 喜美編 『女を装う』 勁草書房
- メイナード 泉子 (1997) 『談話分析の可能性：理論・方法・日本語の表現性』 くろしお出版
- れいのるず=秋葉 かつえ (1993) 『おんなと日本語』 有信堂
- Fairclough, Norman (1989) *Language and Power*. London and New York: Longman.
- Fairclough, Norman (1995a) *Critical Discourse Analysis: The Critical Study of Language*. London and New York: Longman.
- Fairclough, Norman (1995b) *Media Discourse*. London: Arnold.
- Foucault, Michel (1978) *The History of Sexuality*. New York: Pantheon Books.
- Goodwin, Charles and Marjorie Goodwin (1992) Assessments and the construction of context. In Alessandro Duranti and Charles Goodwin, eds. *Rethinking Context: Language as an Interactive Phenomenon*. Cambridge: Cambridge University Press. 151-189.
- Hayashi, Reiko (1997) Interdependence expressed through conversational styles in Japanese women's magazines. *Discourse & Society* 8, 3 : 359-389.

- Hutchby, Ian (1996) *Confrontation Talk: Arguments, Asymmetries, and Power on Talk Radio*. Mahwah, New Jersey: Lawrence Erlbaum.
- McKinstry, John and Asako Nakajima McKinstry (1991) *Jinsei Annai, "life's guide": Glimpses of Japan through a popular advice column*. New York: M. E. Sharpe.
- Ohara, Yumiko (1999) Ideology of language and gender: A critical discourse analysis of Japanese prescriptive texts. In Jef Verschueren, ed. *Language and Ideology: Selected Papers from the 6th International Pragmatics Conference*. Antwerp: International Pragmatics Association. 422-432.
- Ohara, Yumiko (2000) A Critical Discourse Analysis: Ideology of Language and Gender in Japanese. Ph.D. dissertation. University of Hawai'i at Manoa.
- Reynolds, Katsue Akiba (1999) Discourse and social change. *Kotoba* 20: 18-34.
- Satoh, Akira (2001) Constructing Imperial identity: how to quote the Imperial Family and those who address them in the Japanese press. *Discourse & Society* 12, 2: 169-194.
- van Dijk, Teun (1993) Principles of critical discourse analysis. *Discourse & Society* 4,2: 249-283.
- van Dijk, Teun (1998) Opinions and ideologies in the press. In Allan Bell and Peter Garrett, eds. *Approaches to Media Discourse*. Oxford: Basil Blackwell. 21-63.

付 記

本稿は、平成12年9月から平成13年7月にかけて国立国語研究所における「日本語コミュニケーション能力に関する国際共同研究」に招聘外国人研究員として参加した時の研究の一部をまとめたものである。本稿を執筆するにあたって国立国語研究所の佐々木倫子氏（当時）、杉戸清樹氏、山田貞雄氏、ヴォルフラム・シャッフアー氏、ルース・カネギ氏をはじめ多くの方々にお世話になった。心よりお礼を申し上げる次第である。

大原 由美子（おおはら ゆみこ）

〒305-0044 つくば市並木2-122-405

saft@sakura.cc.tsukuba.ac.jp